

# 創設期の東山キャンパス計画

——宮繕顧問・内田祥三の資料を中心に——

木方十根

## 序

国立大学キャンパスのような大規模な建設事業は長期間にわたって行われることが多く、その過程で様々な計画案が作成される。キャンパスの形成史を記述する<sup>①</sup>には、こうした数々の計画案の相互関係や、実現した姿への反映をみる必要がある。

名古屋大学東山キャンパスは、旧帝国大学の諸キャンパスの中でも比較的大規模なものであり、その空間は、中央に延びるオープン・スペース（通称グリーン・ベルト）により特徴づけられている。キャンパスの成立経緯の概要は『名古屋大学五十年史』等により明らかにされている（表1）。創設期の東山キャンパスでは、新設された理工学部（後に理学部、工学部に分離）の実験棟群が建設され、将来構想として、医学部の<sup>③</sup>移転を視野に入れた「大規

模の計画<sup>(4)</sup>の検討が進められていた。しかしこうした創設期のキャンパス計画については不明な点が多く、特に計画図面などの資料に基づく計画案の検討は行われていない。そこで本論では営繕顧問として計画に参画した、内田祥三<sup>よしかず</sup>(明治十八年・一八八五～昭和四十七年・一九七二)が残した、計画図面などの資料<sup>(5)</sup>をとりあげ、創設期名古屋帝国大学のキャンパス計画案の作成過程とその内容について論ずる。

## 一 内田祥三の参画

### 顧問委嘱

昭和十四(一九三九)年四月一日、名古屋帝国大学官制が施行された当時、日本建築学会会長には東京帝国大学建築学科教授、内田祥三が再任していた。<sup>(6)</sup> 渋沢名古屋帝大初代総長は就任後まもなく、教育活動のかたわら、東大営繕課長事務取扱を兼任し、実務面でキャンパス計画を指導したことも知られている内田に、

表 1

東山キャンパス略年表

年	事項
大正14-	八事 (T14) 田代 (S4) 伊勝 (S6) 区画整理組合設立
昭和13	愛知県による八事・田代・伊勝の各区画整理組合に対する寄付の交渉 東山丘陵地を名古屋帝国大学敷地と決定
" 15	鏡ヶ池周辺地区より仮校舎建築開始
" 18-20	工学部一号館 RC 造で建設着手、空襲により型枠焼失
" 21	名古屋帝国大学復興計画 (軍施設等の転用計画)
" 23	愛知県による用地寄付 (約53万 m <sup>2</sup> ) 新制名古屋大学の構想 (評議会)
" 25	名古屋大学整備計画委員会
" 29	名古屋市都市計画学校名古屋大学事業決定区域指定
" 31-4	建築交換による施設整備
" 34-6	講堂・附属図書館の建設寄付
" 36-7	附属中・高校の移転
" 41	農学部の移転

当時の新聞は次のように伝えている。

名古屋市昭和区と千種区に跨る地域に新築されることになった名帝大の校舎は、既設大学の粹をあつめて建築され日本一の立派な大学となるはずで、早くも建設計画を具体化するため渋沢総長は（五月）九日上京したが、設計に関する総てを依頼せんとする総長の意中の人は、建築学界の権威として知られている東大の内田（祥三）教授である。同教授は十四日帰名する渋沢総長とともに来名し、新敷地を实地視察して帰京した上設計に着手するが、結局名大建設の仕事を實際に指導する立役者は内田教授、大蔵省営繕管財局池田（讓次）技師、文部省柴垣（鼎太郎）建築課長の三氏である（後略）。

（『新愛知』市内版 昭和十四年五月十日 括弧内注、句読点筆者）

また渋沢自身は内田への顧問委嘱について次のように記している。

（前略） 当時は官庁用建築中新宮は全部大蔵省営繕管財局で建築することとなっていて、大学では新宮は一切出来なかった。併し大学の建築は特種<sup>マヤ</sup>であるから大学側から教育上種々の希望を建築に取り入れて貰う<sup>マヤ</sup>こととして、本学ではこの（昭和十四）年五月東京大学内田教授（詳三 原文注）を顧問に委嘱して種々意見を聴き大蔵省の担任技術者に希望を申し入れることとした。

（渋沢元治『五十年間の回顧』昭和二十八年 二十二頁）

このように内田には、名古屋帝国大学創立当初から、計画への参画が求められたのである。

### 実地視察と医学部訪問

内田の実地視察は、実際には昭和十四年六月一日に行われた。この実地視察の際、持ち歩きながらメモに使われたものと思われるのが、次の図面である。<sup>(8)</sup>

#### □図1

表題……「昭和十四年実地視察メモ」

年代等……昭和十四年六月一日 実地視察

縮尺……五千分の一

体裁等……陽画 鉛筆仕上げ

書込……「池」「二一〇〇坪」(鏡ヶ池内)「モリ」「七

〇〇〇坪」(現工・一号館および二号館周辺)

「クボミ」(現工・三号館周辺)「正」(鏡ヶ池

畔)

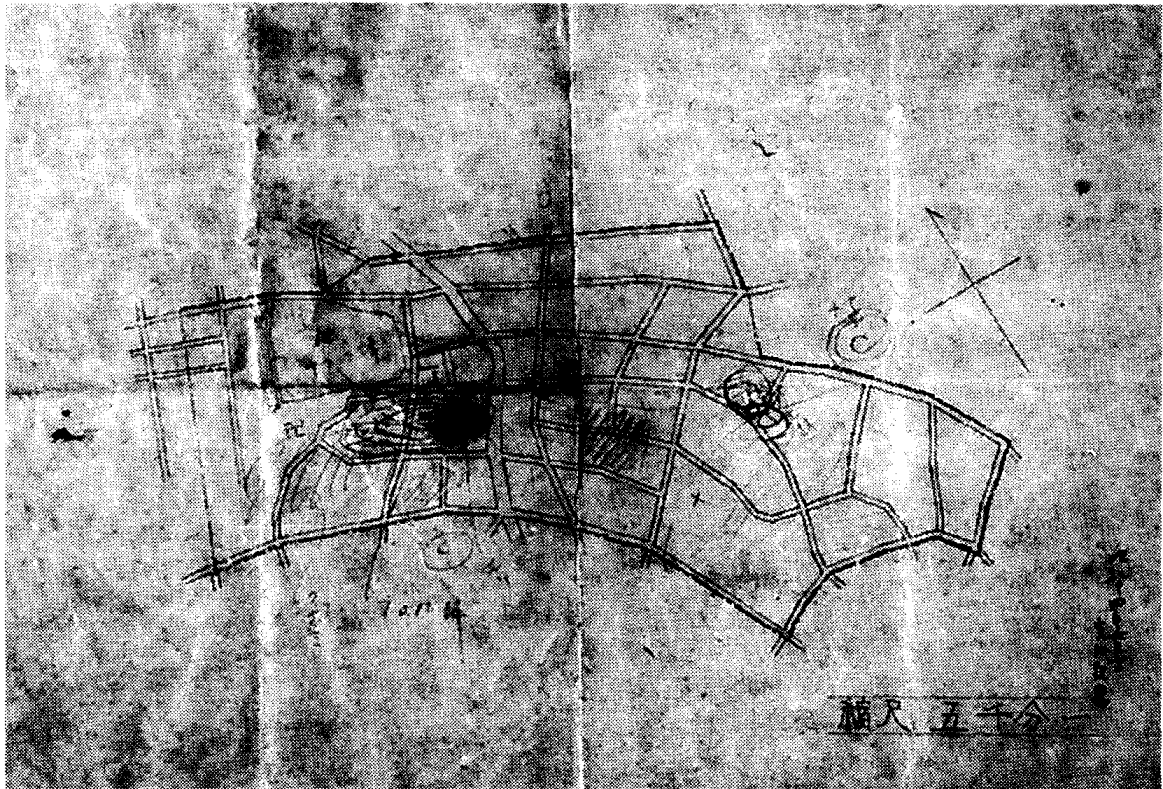


図1

同日の日付がある「名古屋帝大敷地」とメモの付された写真は、この実地視察の際に撮影されたものであろう(図2)。敷地内に描かれている街路は、大正年間から八事、田代、伊勝の各区画整理組合によって進められていた区画整理事業にもとづく街路網である。鏡ヶ池畔の「卍」は、後に改修され渋沢により職員学生集会所「恵風亭」と命名された堂宇「和光寮」と考えられる<sup>(9)</sup>。

同日、内田は鶴舞の医学部に立ち寄り、田村春吉医学部長と面会した。その際田村の側から、次の配置案が示された。

□図3

表題……名古屋帝大医学部配置案

年代等……昭和十四年六月一日

名古屋帝大病院ニテ田村医学部長ヨリ受取、田村医学部長案

縮尺……五千分の一

体裁等……陰画 鉛筆仕上げ

書込……「赤鉛筆スケッチ」(図面右上……病棟平面スケッチ、数値含む)

田村は名古屋帝大創設当初から具体的な検討をすすめていた<sup>(1)</sup>。この計画案の建物配置は、建築群のほぼ中央に本



図2

館を配し、そこから延びる通路によって複数の病棟を分散的形狀に連結する、いわゆるパヴィリオン・タイプで、各室が南面する配置となっている<sup>(12)</sup>。このような病棟配置は、我が国では明治期から採用され、大正期には結核療養所などにも標準的に採用されていたものであり、<sup>(13)</sup> 当時としては目新しいものではなく、むしろ旧態依然としたタイプである。

田村は構想の基本的理念として「各建物に光線と風致を平等に分配する」<sup>(14)</sup> ことに主眼をおいて、内田に対してこの意図を伝えるべく、早々に検討案を準備した。計画案にはこの意図を明快に伝えることが要求され、それに合致するこのタイプは異論もなく採択された。田村の作業については愛知県営繕課に応援を求めたことがあったよう<sup>(15)</sup> で、この図も同課作成のものと考えられる<sup>(16)</sup>。これに対して内田は図上に赤鉛筆で東京帝国大学医学部東病室平面<sup>(16)</sup>（図4）に類似した平面スケッチを残している。内田はパヴィリオン・タイプではなく、各棟にエレベーター等の設備コアを完備した、近代的な病棟の採用を考えていたようである。



なお敷地形状、街路等を示す下図として「昭和十四年実地視察メモ」に使われたものと同じ図面が使われている。当時敷地取得を進めていたのは愛知県都市計画課であり、次に紹介する同課より送付された図面と内容的にも一致していることから、この下図は同課作成と考えるのが妥当である。

### 敷地形状の検討

帰京後まもなく内田の手元には詳細な敷地地形図が送付された。

□ 図 5

表題……「昭和十四年敷地地形図」

年代等……昭和十四年六月九日 赤司都市計画係長ヨリ送付受取

縮尺……三千分の一

体裁等……鉛筆仕上げ、陽画の上に街路等インク仕上げ、色鉛筆着色（小図面6枚を継いで1枚とする）

書込……「縮尺参千分之壹」（図面右上）「凡例：都市計画街路、組合計画街路、組合地区界」（図面左下）

「赤、黒鉛筆による敷地境界の検討跡」（図面上）

図面の送付主は赤司貫一（愛知県都市計画課地方技師<sup>17</sup>）である。下図とされている地形図の上に名古屋市の都市

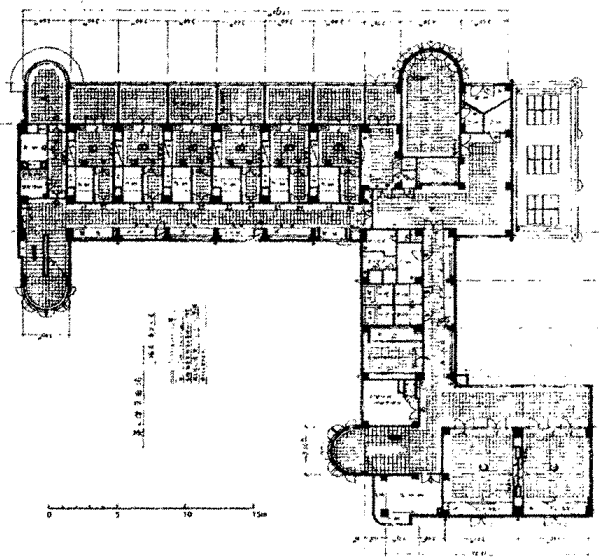


図 4 東京大学医学部東病室平面図  
（東京大学施設部蔵）



图 5



計画街路（現在の四谷・山手通り）および、八事・田代・伊勝各區画整理組合計画街路が描き込まれている。名古屋帝国大学の敷地形状は前掲図1および3と同様である。本図において注目されるのは、うっすらとではあるが赤鉛筆と黒鉛筆によって、二度にわたり敷地境界の再検討が行われている点である（図6）。

昭和十四年八月四日付名古屋新聞<sup>(18)</sup>は大蔵省営繕管財局から敷地形状に関して申し出があったという、田中愛知県知事のコメントを報じている。

（昭和十四年八月）三日午後、県庁で田中（広太郎）愛知県知事は敷地模型図を前に語る。（中略）大蔵省の技術方面から決定した地域（東山公園地域内 原文注）は細長いからもつと丸型の地域にして欲しいとの申し出もあるが、無償で貰った敷地だからさう簡単に行くまい、必要とする残余の地域も折衝中であるから何とか目鼻がつくことと思ふ。

（『名古屋新聞』昭和十四年八月四日 括弧内注、句読点、傍線筆者）

本図面が内田のもとに送付された六月から八月までの間に、内田と大蔵省営繕管財局との間で何らか連絡は取られていただろうから、本図に残された書込線を内田によるものとするれば、「丸型の地域」という要求は、内田の指導

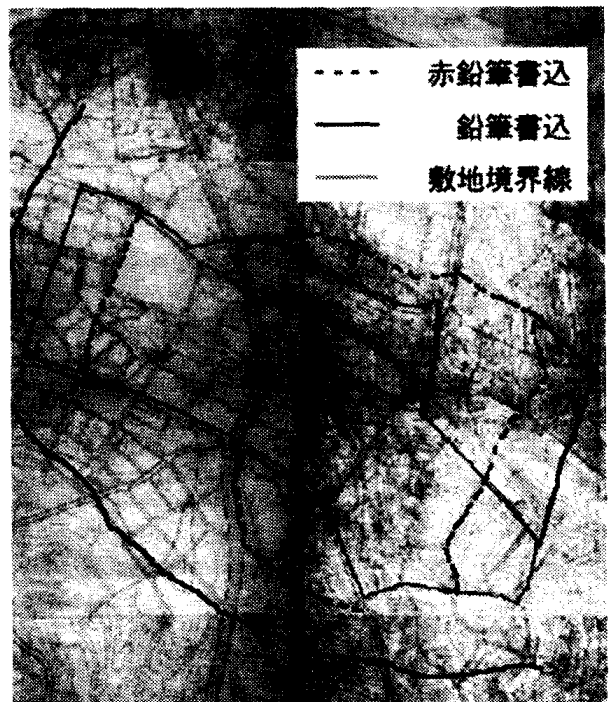


図6

に基づき大蔵省営繕管財局から出されたものと考えられる。

## 建築企画

同年九月には、愛知県庁で名古屋帝国大学の建築に関する協議会が開催された。ただし渋沢によれば、この協議会では建築に関する実質的な審議は出来なかつたようである。

十四年九月愛知県庁で本学建築委員会を開いた。この席上我々は始めて敷地交渉マヤに関する前述の内情（敷地取得の難航）を知って折角の会議も建築に関する審議も出来ず、内田博士は敷地の決定は実に難しいものでこの調子では尚一年余の時日を要するであろうと述べられ、余は無経験のこととてそう遅れては実に困ると思つて、県当局に極力促進を乞うたのであつたが、博士の予言通りその後一カ年余を費した。

（渋沢『五十年間の回顧』二十三頁 括弧内筆者注）

内田は、当協議会のメモ（「昭和十四年九月四日第一回協議会」表3）および協議会直前の内田と渋沢との打ち合わせメモ（「昭和十四年八月十一日渋沢総長ト会議」表2）を残している。<sup>19</sup>

ここでは、工学部、理学部<sup>20</sup>の総面積、工事費の坪単価から概算の総工事費について検討している。渋沢との打ち合わせメモでは、同年三月の第七十四回帝國議會を通過した名古屋帝國大学創設費予算<sup>21</sup>における営繕費の枠内で、事業の検討を行っている。しかし、ほぼ一ヶ月後の協議会メモでの概算では、学生あたり坪数、建築坪単価などを若干多めに計上している。<sup>22</sup> その結果概算の営繕費総額は八百万円となり、当初予算枠の五百万円に対し六割増の大

表 2

		昭和 14 年 8 月 11 日		渋沢総長ト会議 教室ニテ	
本部	1,000,000	別			
工学部	60	40	40	40	20
	機械、電気、化学、金属、航空、200 人				
理学部					
	物理	化学	数学	本部	2,679
以上ガ	9,000,000 円ノ予算ノ中ニ入ル			理	2,911
農学部ハ	現在ノ敷地この考ニ入レズ			工	6,717
					12,307
				内理工ノ分 9,628	
	内建築費 4,761,905		アトハ事ム費		
5,000,000					
	14	15	16	17	18
	100,000	600,000	70,000	1,200,000	1,200,000
					1,200,000
					(50 坪ヲ要スルヤモ知レズ)
学生 1 人ニ付	平均 40 坪 (各種実験室ヲ含ム)			200 人×40=	8,000 坪 工
				50 人×40=	2,000 坪 理
					500 坪 本部
					10,500 坪
建築費	300 円/坪				
暖房、電気、供排水	100 /坪				
	400 円/坪				
					10,500×400=4,200,000
					5,000,000-4,200,000=800,000 円
					之ヲ庭園運動設備費ニ充当

表 3

昭和 14 年 9 月 4 日	
名古屋愛知県庁ニ於テ第 1 回協議会	
知事、総務部長、都市計画課長、	
渋沢総長、生源寺工学部長、医学部長、病院長、事務官	
伊部大蔵技師 内田等出席	
8 月 31 日寄付□□ 143,000 坪	
別途ノ区画整理組合ガ出来別ニ 42,000 坪寄付ノ筈	
坪数及予算ノ略計算	
学生 1 人ニ付 (每学年 1 人延 3 人)	50 坪トスレバ
工学部	200 人×50 坪 = 10,000 坪
理学部	50 人×50 坪 = 2,500
本部、	100 100 100 100 200
学生施設、	総長、庶務、会計、 営繕、 学生配属将校 = 600
食堂、売店、集会室、道場等	= 400
	13,500 坪
単価	建築費 400 円/坪
	暖房、電気、瓦斯、給排水 120
	520 円/坪
	13,500×520 = 7,020,000
	学生運動施設、水道、瓦斯等 = 980,000
	= 8,000,000

幅増額となっている。内田は余裕のある予算運用を期待して、予算枠の拡大を提言したのではないだろうか。

その後、同年十月以降、内田は名古屋帝国大学の新設建物の所要室の割り出し、規模算定など詳細な検討に入つた（「昭和十四年十月―十一月規模算定メモ」表4）。内田は、東京帝国大学における応用化学、鉱山・冶金学など、名古屋帝国大学で設置予定の学科と同系学科の教室および実験室の使用実態を参考にして、名古屋帝国大学の建築規模計画を行った。<sup>(23)</sup> その際、東京帝国大学営繕課をはじめ、「宗宮教授」（宗宮尚行 同応用化学科教授）「山田助教」（山田直平 同電気学科助教）らと協同していた。算出結果の数値は、名古屋帝国大学の事務方から送付された「創設工事建物坪数内訳表」（表5）<sup>(26)</sup> の数値と対照されている。<sup>(27)</sup>

内田は、名古屋帝国大学の建築を、東京帝国大学のそれと同様の、帝国大学として十分な内容をそなえたものとするため作業を行っていたのである。

一方で、昭和十五年度前半には大蔵省営繕管財局によって、鏡ヶ池東側の整地計画および、のちに同敷地に建設される木造実験棟群の設計が進められた（図7Ⅱ口絵V）。<sup>(28)</sup> ただし内田は、諸事情により木造で建設されることになった実験棟群の計画には、深く関与してはいなかったようである。<sup>(29)</sup>

表 4

昭和 14 年 10 月—11 月

東京帝国大学ニ於ケル教室ノ面積

応用化学 学生数 30 人×3=90 人  
 鉱山及冶金学 学生数 (25 人+23 人)×3=144 人  
 室単位 大 2.5 間×4.5 間=11.25 坪  
           中 2.5 間×4 =10  
           小 2.5 間×3.5 =8.75

	応化			鉱山			冶金		
地階	大 7	中 10	小 13		中 3	小 8	大 7	中 7	
1 階	大 7	中 10	小 12	大 3	中 5		大 4	中 8	小 8
2 階		中 10	小 13	大 4	中 6		大 5		小 8
3 階		中 10	小 13	大 3	中 3	小 3	大 2	中 10	小 5
計	大 14	中 40	小 51	大 10	中 17	小 11	大 18	中 25	小 21

応化  $14 \times 11.25 = 157.5$   
 $40 \times 10 = 400.0$   
 $\underline{\hspace{1.5cm}} = 445.25$   
 $1002.25$   
 $\underline{\hspace{1.5cm}} 200$  ……一般分析ニ使用ノ面積  
 $802.25$

$802.25 \div 90 \approx 9$  坪/学生 1 人 net area

鉱山及冶金

$(10+18) \times 11.25 = 315$  内爐室…… $2.5 \times 4.5 \times 3 = 33.75$  坪  
 $(17+25) \times 10 = 420$  net area  
 $(11+21) \times 8.75 = 280$   
 $\underline{\hspace{1.5cm}} 1015$

$1015 \div 144 \approx 7$  坪/学生 1 人

電気 (第 3 号館) 35 人×3=105 人

地階 335.231 坪  
 1 階 378.584  
 2 階 597.707  
 3 階 0  
 4 階 85.668  
 $1397.190$  ……廊下、階段、便所等ヲ含ム面積

室単位

- ① 3 間× 3.5 間 = 10.5 坪
- ② 2 × 4.5 = 9

$$\textcircled{3} \quad 2.5 \times 3.5 = 8.75$$

$$\textcircled{4} \quad 2 \times 3.5 = 7$$

	①	②	③	④	
地階	3	4	11	10	電気地階□ケノ面積ハ
1階		4	17	9	約315坪 (net area)
2階	6	17	18	11	ナリ
4階			8		
計	9	25	54	30	

$$9 \times 10.5 = 94.5$$

$$25 \times 9 = 225.0$$

$$54 \times 8.75 = 472.5$$

$$30 \times 7 = 210.0$$

$$\underline{\hspace{1.5cm}} \\ 1002.0$$

外ニ高压実験室 12.5間×12.5間=156.25坪

高サ 棟高65尺、軒高55尺

1002坪÷105人≒9.5坪/学生1人

外ニ 156.25÷105≒1.5/学生1人 高压実験室

機械工学科 80人×3=240人

室単位 3間×4.5間=13.5坪

3間×3.5間=10.5

地階 材料実験室其他  $26 \times 6 + 15 \times 6 = 156 + 90 = 246$  坪

1階 7単位×13.5=94.5坪 製図室  $9 \times 3 \times 6 = 162$  坪

2  $\times 10.5 = 21$

115.5

$115 + 162 = 277.5$  坪

2階 8  $\times 13.5 = 108.0$  製図室 162

9  $\times 10.5 = 94.5$

$202.5 + 162 = 364.5$

202.5

3階 8  $\times 13.5 =$

108.0

996.0

外ニ機械工学科実験室 但シ材料実験室ハ上記教室ノ地下室

ニアリ (210坪 net area)

水力 410 m<sup>2</sup> 123 坪

内燃機関 375 112.5

熱機関 375 112.5

工学実験所	1080	<u>324</u>	罐室, 鑄物實習場, 鉄工場, 工具材料倉庫
		672.0	仕上機械、木工工作實驗室、工具刃物實驗室、機械研究室、工場係員室、職工更衣室、洗面所便所

996.0 ÷ 240 = 4.15 坪/学生 1 人

外二實驗室 672.0 ÷ 240 = 2.8 坪/学生 1 人

航空学科 (機体)	学生数	機体	1 年 19 人	19 人 × 3 = 57 人
		原動機	1 年 8 人	8 人 × 3 = 24 人

室単位	2 × 3.5 坪 =	7 坪
地階	9 × 7	63
1 階	13 × 7	91
2 階	11 × 7	77
4 階	9 × 7	<u>63</u>
		294 坪

外二風洞實驗室 6 間 × 14 間 = 84 坪 軒高 32 尺 外二一部地下 7 尺

294

84

378 ÷ 57 = 6.6 / 1 人

航空発動機

教員室 10.5 + 10.5 + 10.5 + 9 = 54 坪

教務室 12  
66 坪

共通学科

応用物理 164.5 坪 net area 昭和14年11月吉田技師調

化学分析 200 " " 10月宗宮教授ヨリ

数学力学 職員室ノミ

工学部事務室

部長室	16.75
会議室	29.906
事務室	13.46
"	24.85
"	13.46
応接室	6.00
小使室	6.00
宿直室及応接室	16.75
物理	<u>29.906</u>
	157.082

応用物理申告者	第1	391	
	第2	257	
		648	本年絶対定員増加ノ為3割増トス レバ平常ノ人員想定 約500人
工業分析申告者		171	同上平常ノ想定人員 約130人

応物  $164.5 \div 500 \text{人} \approx 0.33 \text{坪/1人}$   
 工分  $171 \div 130 \text{人} \approx 1.3 \text{坪/1人}$

以上ヲ綜合スルト、工学部ニ於テハ学生1人ニ付 net area ニテ

機械 7坪  
 航空 6.6坪  
 電気 11坪  
 応化 9坪  
 金属 7坪

トナル

今回ノ標準トシテハ 延坪：net area = 10.0 : 6.5 トスレバ  
 機械、航空及金属ハ8坪/1人トシ  $8 \times 10 / 6.5 \approx 12.3 \text{坪/1人}$   
 電気及応化ハ 10坪/1人トス  $10 \times 10 / 6.5 \approx 15.4 \text{坪/1人}$   
 機械ハ今回ノ分人員甚ダ小ナルユヘ、航空ハ東大ノモノ実験室少キ故  
 金属ハ現在ノ東大ノモノ著シク狭キ觀アルニ付幾分増加  
 応化及電気ハ其ノ平均ヲトル

以上ノ外ニ共通学科用トシテ  $0.33 \times 10 / 6.5 \approx 0.5 \text{坪/1人}$   
 応用物理 0.33坪/1人  
 工業分析 1.3坪/1人  $1.3 \times 10 / 6.5 = 2 \text{坪/1人}$   
 数学、力学、応力、職員室ノミ 放射線  
 事務室 150坪  $150 \times 10 / 6.5 \approx 230 \text{坪}$

数学 力学 応力 放射線  
 2単位 2単位 2単位 4単位 計12単位 1単位延10坪トス  
 事務応接室2単位  $12 \times 10 = 120 \text{坪}$

講堂

大講堂 600人収容 1坪3人トシ 200坪  
 中講堂 200人収容2個  $200 / 3 \times 2 = 133 / 333 \text{ net}$   $333 \times 10 / 6.5 \approx 500 \text{坪}$



理学部

現在東大理学部ニ於ケル学生定員ハ大学一覽ニヨリ大体下記ノ如ク推察サル

数学	14 人×3= 42 人	化学	24 人×3= 72 人
物理学	32 人×3= <u>96 人</u>		
	138		

天文学	5 人×3= 15 人
地震学	5 人×3= <u>15 人</u>
	168 人

数学、物理学、地震学、及天文学ヲ収容スル目的ヲ以テ計画セル理学部第1号館ノ面積ハ

現ニ利用シツツアルモノ	1,713 坪
基礎工事ノミヲ実施シタル分	<u>1,226 坪</u>
	2,939 坪

コノ用途区分ハ明カナラザルヲ以テ仮リニ第1号館ニ於ケル全学科ノ学生数168人ト物理及数学ノ138人トヲ基礎トシテ按分比例ニヨリ物理数学ノ坪数ヲ求ムレバ

$$2,939 \times 138 / 168 \approx 2,414 \text{ 坪トナリ}$$

$$2,414 \div 139 \approx 17.4 \text{ 坪/学生 1 人 net area ニアラス総延坪ナリ}$$

化学教室

旧館	983.438
新館	<u>309.602</u> ……内震災復旧費ニヨル増築ハ109,746ナリ
計	1,293.040

$$1,293,040 \div 72 \approx 18 \text{ 坪/学生 1 人 net area ニアラス総延坪ナリ}$$

以上ノ事例ニヨリ且工学部トノ関係ヲ考慮シ、工学部ノ電気及応化ト同様其延坪数ヲ学生1人当リ15.4坪/1人トス

工学部面積

機械	3×60 人×12.3	2,214
航空	3×20 人×12.3	738
電気	3×40 人×15.4	1,848
応化	3×40 人×15.4	1,848
金属	3×40 人×12.3	1,476
応用物理	(60+20+40+40+40)×2×0.5	200
工業分析	(40+40)×2	160
数学、力学、応用力学、放射線		120
大講堂1、中講堂2		500
部長室、事務室関係		<u>230</u>

$$9,334 \quad \text{予算坪数 } 6,717$$

以上ノ面積ノ中別建実験室ト為スベキ分

機械 水力、内燃機関、熱機関、工学実験所 (材料試験室ヲ含マズ)

672 坪 net、延 672×10/8=840 坪

航空 風洞室及発動機実験室 (風洞室ト同面積トミル)

延 84×2=168 坪

電気 高圧実験室及第3号館地下室ノ半分

延 156.25+1/2×335.231≒323 坪

金属 現在ノ鉱山及冶金地下室ノ半分トス (爐室、選鉱室等)

1/2×(7×11.25+10×10+3×8.75)=102.5 net

延 102.5×10/8≒128 坪

備考 実験室ニ就テハ有効面積ヲ全面積ノ8割トミル、即チ

10:8=x:net area

工学部

	本館内ノ面積	附属家ノ面積	計
機械	1,374 坪	840 坪	2,214
航空	570	168	738
電気	1,525	323	1,848
応化	1,848	0	1,848
金属	1,348	128	1,476
共通学科			
(電) (航) (キカイ)			
応物、□力、応力、放射線	320	0	320
工業分析 (金属)	160	0	160
事務室関係	230	0	230
講堂	500	0	500
	7,875	1,459	9,334
	(6,423)	(1,195)	(7,618)
工学部ヨサン	6,717	昭和15年3月1日 渋沢総長来校協議	
本部木造分	901		
	7,618		

コレニ按分ス

金属ハ大体東大ノ冶金ト考ヘレバ15.4坪/人トスル方適當?

昭和15年3月5日 電気山田助教授来室

詳細ノ説明ヲナス

表5

創設工事建物坪数内訳表					
区分	本部	工学部	理学部	計	備考
本部	940坪	0坪	0坪	940坪	コンクリート造
貴賓室	30	0	0	30	
総長室	25	0	0	25	
応接室	35	0	0	35	総長応接室15坪 一般〃20
庶務課長室	10	0	0	10	
会計課長室	10	0	0	10	
学生課長室	10	0	0	10	
建築課長室	10	0	0	10	
学生主事室	20	0	0	20	
軍事教官室	10	0	0	10	
庶務課事務室	36	0	0	36	
会計課事務室	60	0	0	60	
学生課事務室	24	0	0	24	
建築課事務室	40	0	0	40	
学医室	10	0	0	10	
会議室	90	0	0	90	
新聞記者室	12	0	0	12	
受付	10	0	0	10	
学友会室	12	0	0	12	
巡視室及寢室	12	0	0	12	
宿直室	8	0	0	8	
食堂	40	0	0	40	
電話交換室 及蓄電池室	50	0	0	50	
小使室及便所	60	0	0	60	
倉庫及物置	100	0	0	100	
階段及廊下	216	0	0	216	
講堂	450	0	0	450	コンクリート造
講堂	320	0	0	320	
控室	20	0	0	20	
準備室其他	30	0	0	30	
奉安庫	5	0	0	5	
階段及廊下	75	0	0	75	
中央汽罐室其他	474	0	0	474	コンクリート造
汽罐室	150	0	0	150	
印刷室及工作室	100	0	0	100	

変電室	80	0	0	80	
ポンプ室	30	0	0	30	
銃器室	60	0	0	60	
車庫及運転手室	30	0	0	30	
門衛所	24	0	0	24	
柔剣道場其他	925	0	0	925	木造
柔剣道場	150	0	0	150	
弓道場	25	0	0	25	
運動場附属家	100	0	0	100	
学生集会所	400	0	0	400	
学生診療所	40	0	0	40	
官舎	100	0	0	100	本年度年割額ニテ 施行(ママ)ノ予定
艇庫	110	0	0	110	
学部	0	6217	2761	8978	コンクリート造
学部長室	0	15	15	30	
応接室	0	20	20	40	学部長応接室10坪 一般 " 10
事務室	0	40	30	70	
会議室	0	50	40	90	
宿直室	0	8	8	16	
受付	0	8	8	16	
倉庫及物置	0	60	50	110	
教官室	0	776	430	1206	
講義室	0	480	170	650	
特別講義室	0	180	140	320	
教官研究室	0	640	308	948	
実験室	0	1155	445	1600	
特別研究室及特 殊実験室	0	300	150	450	
製図室	0	450	0	450	
学生控室	0	220	70	290	
更衣室	0	80	40	120	
図書室	0	150	100	250	
小使室及便所	0	160	100	260	
階段及廊下	0	1425	637	2062	
附属工場	0	500	150	650	コンクリート造
其ノ他	901	0	0	901	木造 便宜上本部に掲記ス
合計	3690	6717	2911	13318	
木造	1826	0	0	1826	
コンクリート造	1864	6717	2911	11492	

## 二 計画案の作成過程とその内容

### 全体計画案

昭和十五年八月には、現在確認できる最も初期の、東山キャンパスの全体計画案が作成された。

□ 図 8・9 「分析図」(□口絵 図 I・II)

表題……「昭和十五年名古屋帝国大学全体計画図」

年代等……昭和十五年八月廿八日 渋沢総長より

縮尺……三千分の一

体裁等……陽画 鉛筆・インク仕上げ

書込……建物名称一覧表(原図中) 「秘」印

渋沢の回顧録に次のような記述がある。

(昭和十五年) 九月四日

東山敷地も大体決定の見透しがついたから建築委員会を開催して本学建築設計の大綱を協議した。この協議会で正門、道路、本部、工、理両学部の位置、下水路、等の大体計画を決定した。尚将来医学部を建設する位置を

も予定した。(当時は鉄筋建築も認められ物価も安かったから可なり大規模の計画をたて、若しこの計画が実現すれば東山に威容を現じたのであった 原文注)

(渋沢『五十年の回顧』 五十六頁)

本図はこの建築委員会の直前のものであり、ここでいう「大体計画」「可なり大規模の計画」とは、ほぼこの図のとおり計画を指すと思われる。内田が「渋沢総長より」受け取ったとして、計画案の作成主体は、東京の内田周辺ではなく渋沢の周辺、すなわち在名の技術者よって作成された可能性を考えることができる。

計画案の内容の検討に移る。キャンパス中央に講堂および本部が配置され、講堂前からキャンパス西端まで直線的に延びる中央街路が描かれている。講堂、その裏手に本部、南に図書館が配置される構成は現在の豊田講堂、本部、旧古川図書館の配置構成に近い。柔剣道場が中央街路をはさみ図書館と対置されている<sup>(30)</sup>。山手通り西部分には理学部、工学部の建築群が計画されている。中央街路の南北で理・工学部のゾーン分けがされているのではなく、中央街路南北とも、東寄りを理学部、西寄りを工学部としている。現在の附属学校の場所には「理工学部総合研究所」が計画されている。鏡ヶ池東の木造実験棟エリアはその後実現したとおりの配置型となっている。現在の工学部9号館付近(創設期における理学部エリア)は医学部系の動物飼育室が配置されている。医学部および附属病院の建築物は、図2の田村案同様、各室が南面する平行配置の計画がなされている。

この計画の中央街路や、医学部諸施設の配置は、敷地の高低に対して十分な配慮がなされているとはいえない<sup>(31)</sup>。特に医学部および付属病院部分の図面内容は、所要施設の建築面積を敷地に投影した段階にとどまっています、配置型が建築的に充分検討されているとはいえない<sup>(32)</sup>。なお昭和十四年各図の敷地範囲と比べると東部は新たに取得・

拡張されている。<sup>(33)</sup>

建築委員会の二ヶ月後の同年十一月三日から八日にかけて、東京帝国大学林学科教授本多静六らにより、土質・樹種の調査が行われ、その結果は『名古屋帝国大学敷地内植樹調査報告』<sup>(34)</sup>にまとめられている。その報告に当時の「原案」についての記述をみることが出来る。そこでの本部、講堂をはじめとする各研究施設の配置についての言及は、この計画図の配置と符合しており、本多らのいう「原案」は、この計画案のことであると思われる。この報告に中央街路の幅員について次のような記述がある。

#### 六、植栽計画方針

(前略) 主要幹線道路は正門より大学本部に至る幅員十六間(原案には二十五間とあるも十六間を適当とす)の四条並木道路にして使用行路樹<sup>マツ</sup>はけやき及くすの二種とする。(後略)

(本多静六・稲垣龍一『名古屋帝国大学敷地内植樹調査報告』昭和十五年 九頁 傍線筆者 原文カタカナ)

本多らは中央街路の幅二十五間という幅員を不適當であると判断している。つまりこの計画の中央街路は、キャンパス造園計画としては特異な広幅員であると見なされたのである。このことは、この計画案の最も重要な特徴を指摘している。東山キャンパスの中央には、計画の初期段階から「広すぎる」ほどのオープン・スペースが構想されていたのである。<sup>(36)</sup>

本多らの指摘は、次にしめす昭和十七年の計画案に反映された。

□図10・11「分析図」(Ⅱ口絵Ⅲ・Ⅳ)

表題……名古屋帝国大学計画案

年代等……昭和十七年一月二十七日 廣川教授ヨリ 医学部ノ関係アリテ秘

縮尺………三千分の一

体裁等……陰画 鉛筆

書込………建物名称・建坪一覧表(原図中)

「廣川教授」とは当時の名古屋高等工業学校建築学科教授、廣川誠三郎である。<sup>(37)</sup>

中央街路の幅員は前述の本多の指摘を受けて、幅十六間に減じられている。この計画案は「昭和十五年全体計画図」と比べると、総じて計画内容に進展がみられる。中央街路は敷地の高低差を緩和するために西端部分で曲がり、キャンパス西側正門前のサークルへと続いている。中央街路東端部には大学本部を据え、中央街路南側の図書館と正対して中央講堂を配置している点、鏡ヶ池南には大規模建築を建設せず、唯一職員・学生集会所を配置している点は、前掲の全体計画図と異なる。後の点については鏡ヶ池周辺の風致を尊重しようという意図をみる<sup>(38)</sup>ことができる。工学部第一号館は現状とほぼ同位置(ただし実際に建築されたのは南部分のみ)である。

医学部および医学部付属病院の配置をみると、北部の門から谷筋に沿い街路を設け、その突き当たりの南東部を大きく凹弧状の街路および建物配置形態とすることにより、敷地形状との調整を図っている。

街路や建築の中心線などの軸線の交点を、凹または凹弧状の広場や部屋により調整処理する手法は十九世紀を通じて世界的に最も影響力のあった建築教育機関であるフランスのエコール・デ・ボザール (Ecole des Beaux-Arts)



において定式化されており、<sup>(9)</sup>内田も大同の都市計画をはじめとする諸計画でこうした構成法を多用している。<sup>(10)</sup>ただしこの計画案については、円弧の中心に至る街路の位置付けが不明確であるなど、構成法が未熟なことから、内田の教え子、広川が設計した可能性が大きいと考えられる。前にも見たとおり、医学部の移転計画については、田村医学部長を中心とする独自の動きがあった。その関係上、この計画は「医学部ノ関係アリテ秘」とされたと考えられる。

戦後まもなくの米軍撮影空中写真(図12)では、ほぼこの計画どおり、工学部一号館の建設および中央街路の整地が着手されたことを確認できる。つまりこの計画は創設期におけるキャンパス計画の、ほぼ最終的なものとも<sup>(11)</sup>みることができる。

「昭和十五年名古屋帝国大学全体計画図」における中央街路が、広幅員で直線的であるために有していた空間的特質は、この計画案では失われている(図13)。広川として顧問として指導する立場にあった内田も、「昭和十五



図12 米軍撮影空中写真(昭和21年 国土地理院蔵)

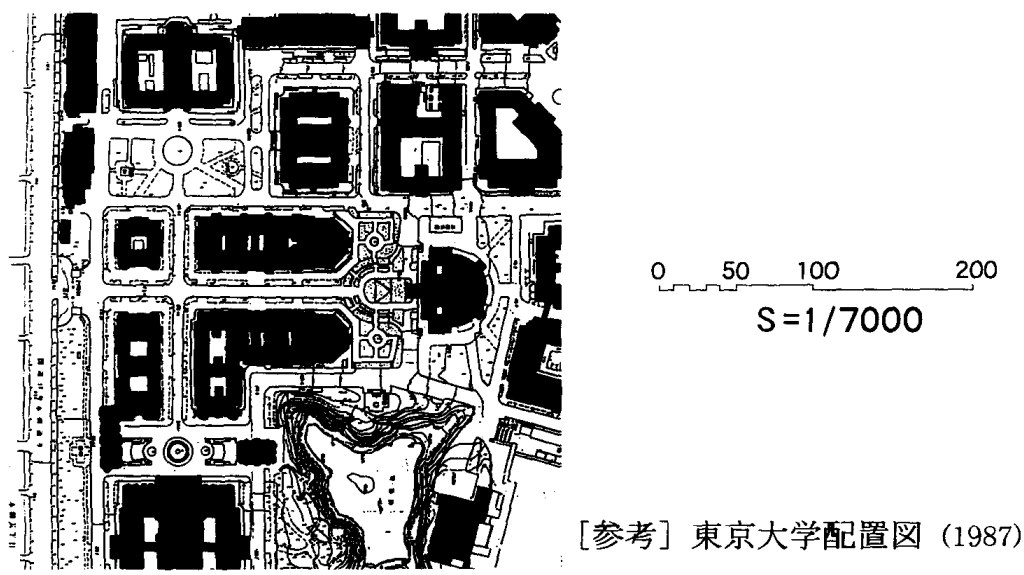
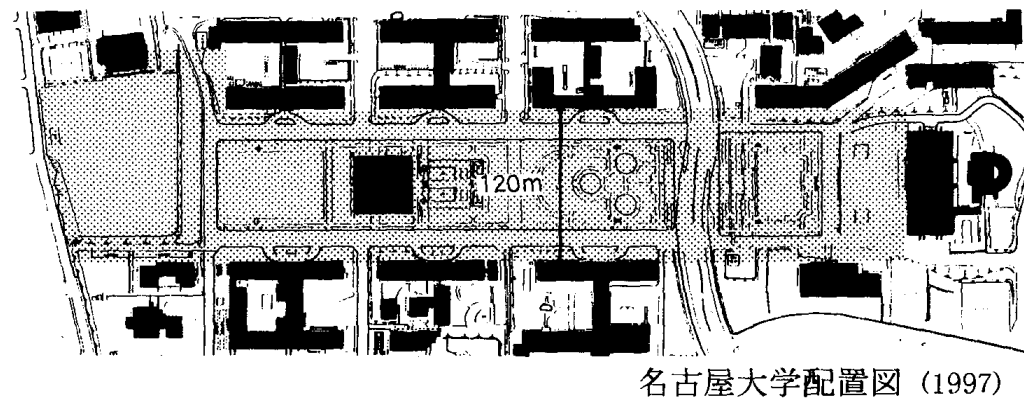
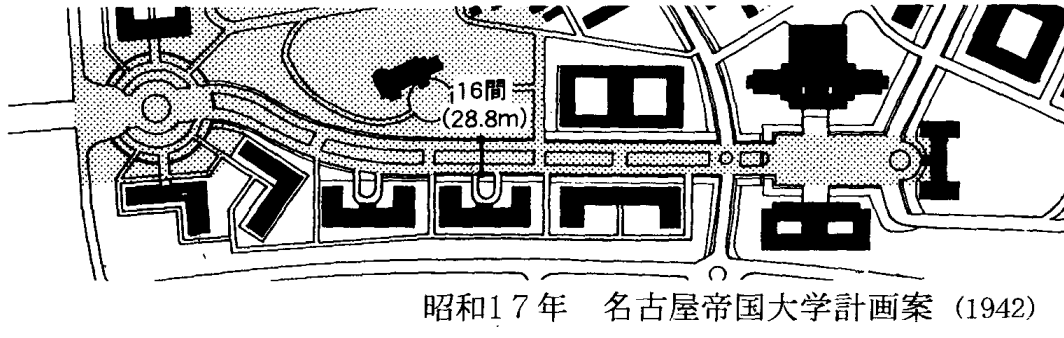
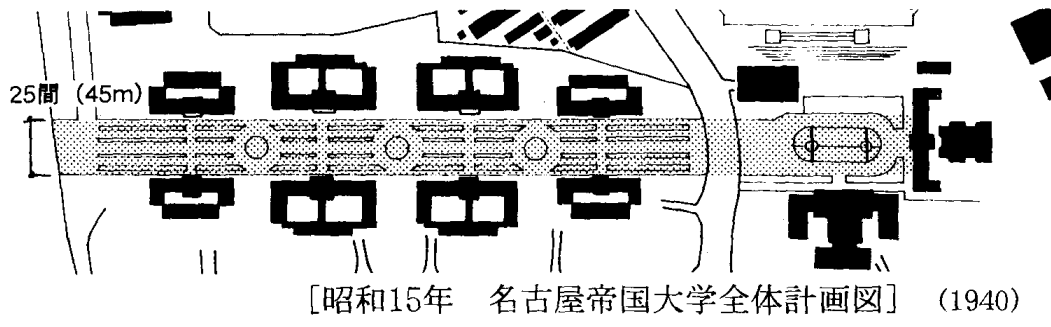


図13 中央街路の空間的特質

年名古屋帝国大学全体計画図」にみる中央街路の空間的特質を積極的に評価して以後の計画案に踏襲することは考  
えなかつたようである。

### 建築平面

それでは個々の建物の平面プランはどのように考えられていたのだろうか。内田資料中には、日付不明の次の平  
面図がある。

#### □図14・15（読取図）

表題……第壱回平面図、第弐階平面図

年代等……なし

縮尺……百分の一

体裁等……陰画 鉛筆仕上げ

書込……鉛筆にて部屋名・部屋番号書き込み

これらは鉄筋コンクリート造建築の平面図であり、二階中央にメイン・エントランスがとられ、一階外壁周辺に  
ドライエリア<sup>(42)</sup>設けられている点は、現在の工学部旧一号館と同様である。ただし最終的に建設された建築の規模お  
よび平面型とは異なっている<sup>(43)</sup>。

この計画の平面は、基本的な構成から詳細に至るまで、現在の東京大学工学部四号館の平面（図16）に酷似して

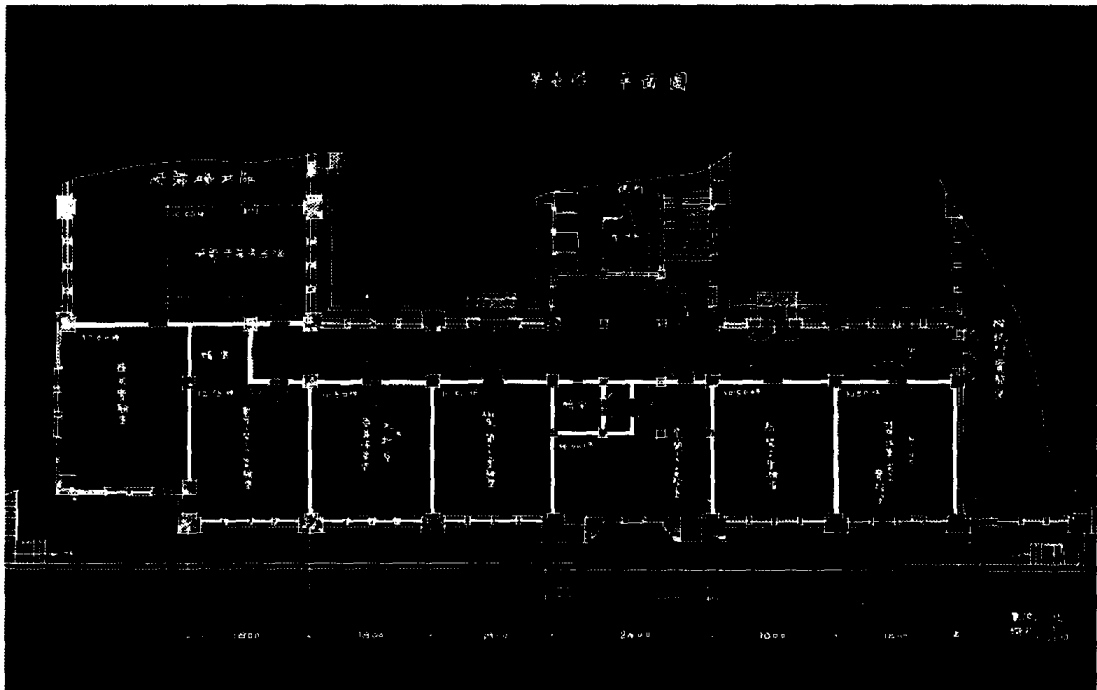
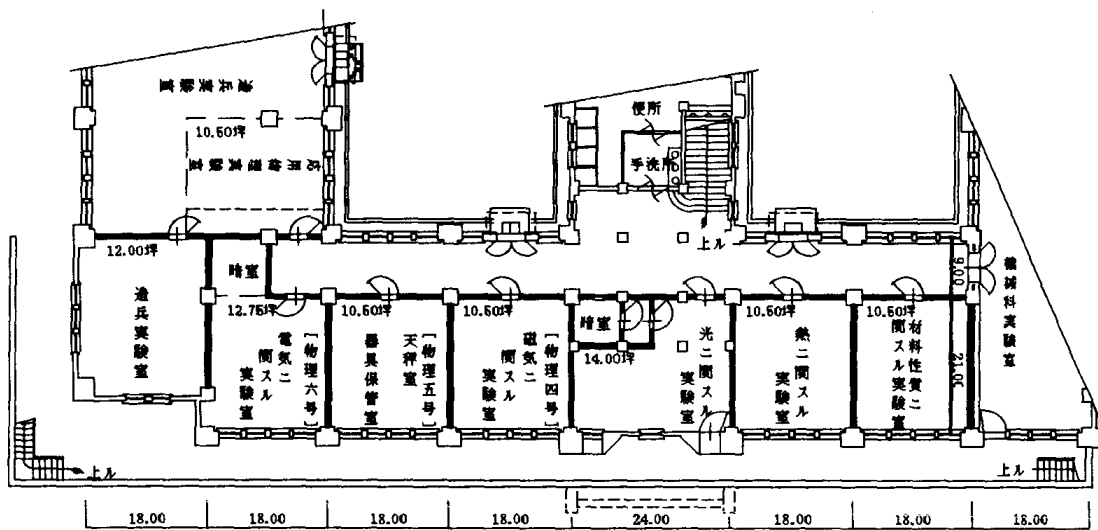


图 14

第壹階 平面図



第貳階 平面図

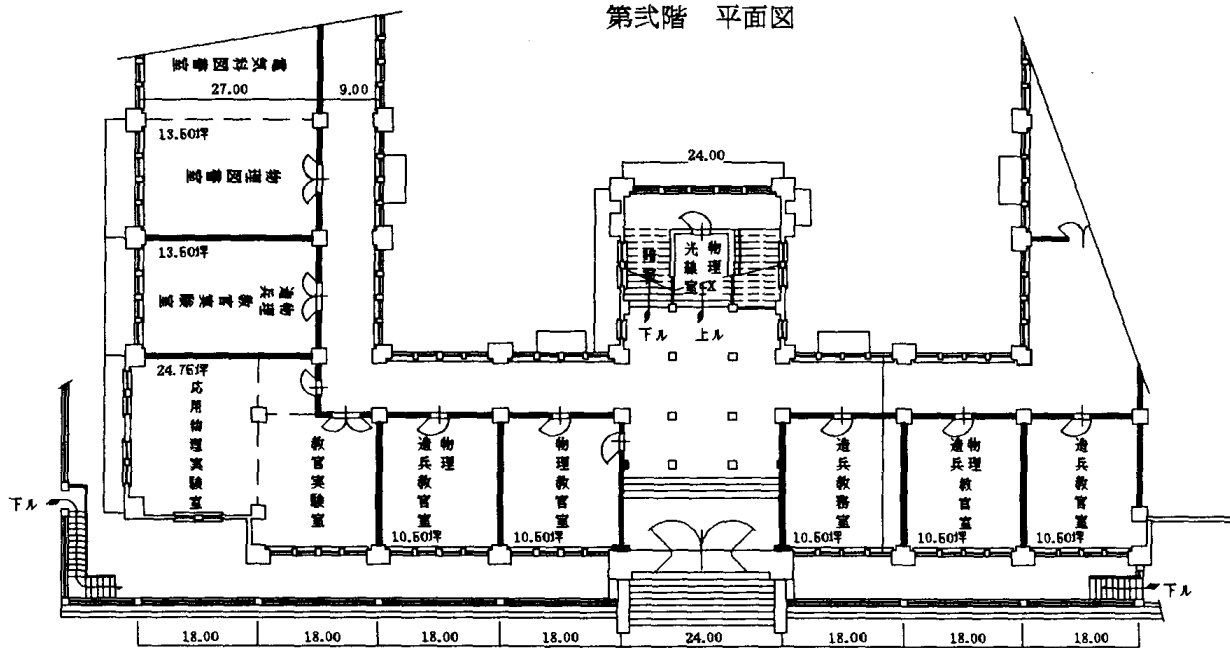


図 15 前図読取図 (作図、佐々木司)

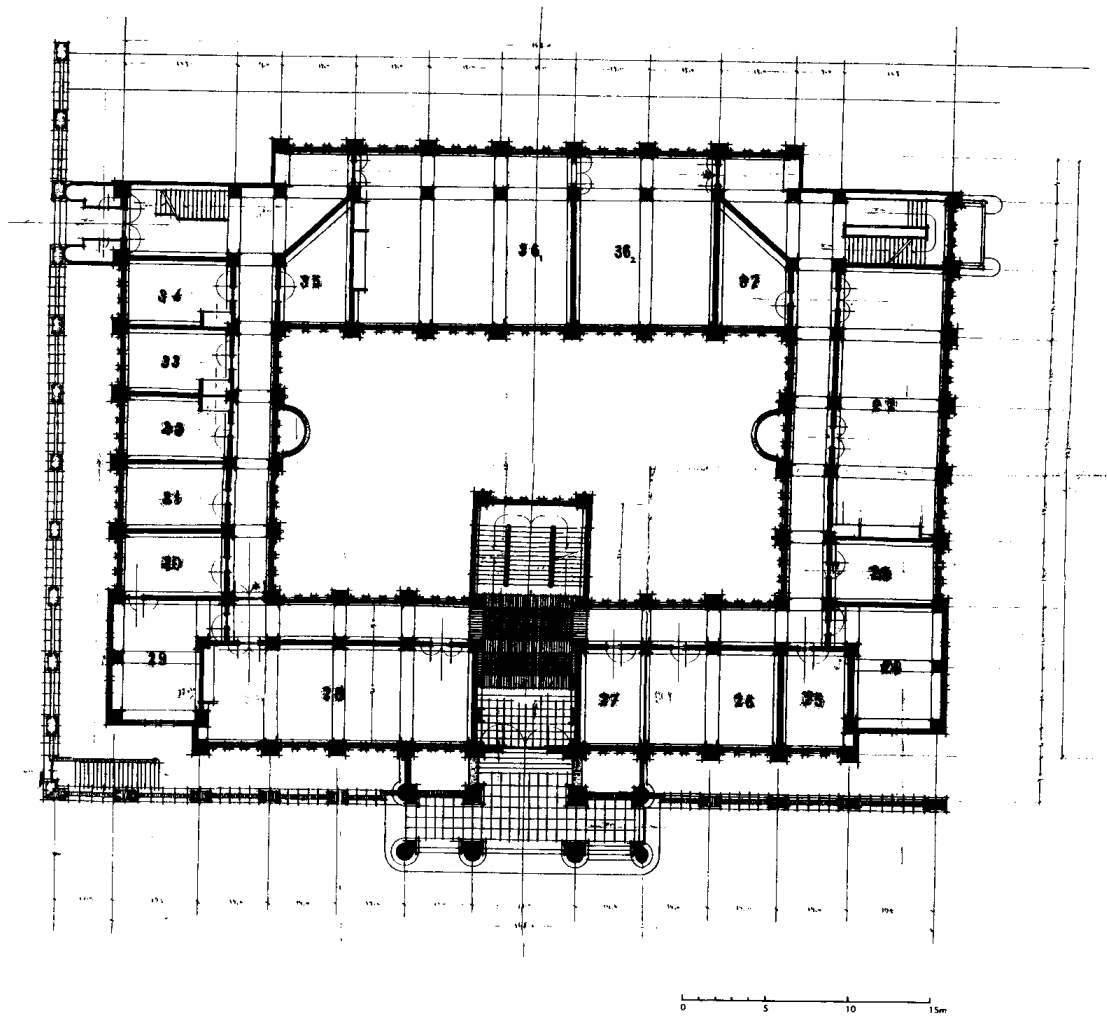


図 16 東大工学部四号館平面図 (東京大学施設部蔵)

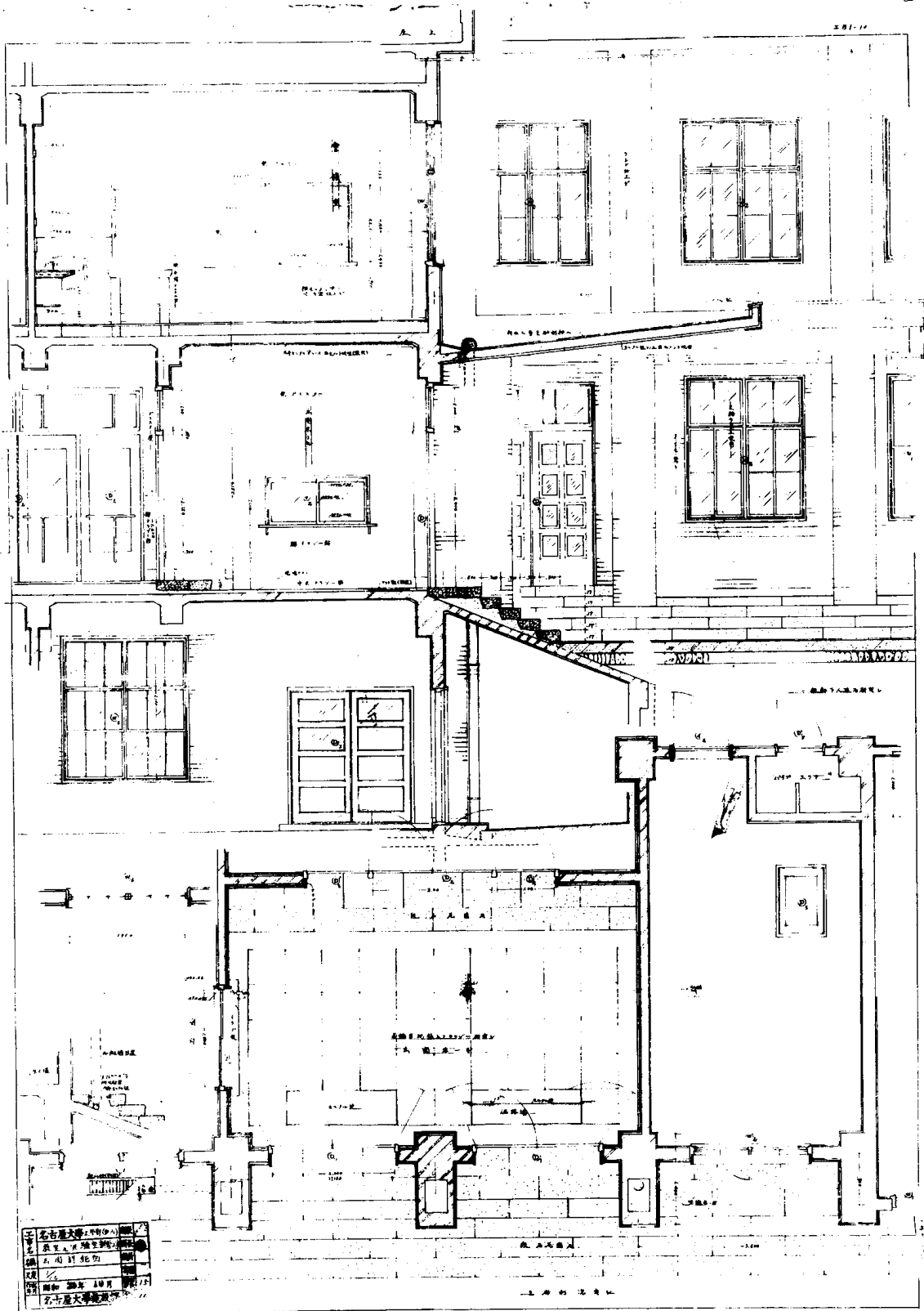


図 17 工学部旧一号館玄関詳細図 (名古屋大学施設部蔵)

いる。ただし桁行き方向の柱間がより大きくなっている。

また、口絵Ⅰの「昭和十五年名古屋帝国大学全体計画図」の工学部棟、理学部棟にも、東大四号館に類似した平面型が採用されている。前述のとおり、昭和十四年十月以降、内田は名古屋帝国大学の建築の規模算定を、東京帝国大学における応用化学、鉱山・冶金学など、設置予定学科と同系学科の教室を参照しながら行っている。これらの学科が使用していたのが東大四号館であり、その平面型は、初期段階の全体計画案を作成する際、直接的に参照されたのである。同様にこの図も、東大四号館を参照して作成した、名古屋帝国大学工学部一号館の初期計画案とみることができ<sup>(4)</sup>る。

工学部一号館の工事は戦後昭和二十五年に再開されたが、<sup>(4)</sup>その際の実施設計担当者<sup>(45)</sup>によると、詳細な設計図面等は散逸<sup>(46)</sup>して、出来上がっていた基礎部分と、スチールサッシなど現場周辺に野積み<sup>(47)</sup>にされていた建築資材を再構成し設計図面を作成し直した<sup>(48)</sup>と<sup>(49)</sup>のことである（図17）。

旧一号館の玄関廻りは淡黄色のスクラッチタイル貼、柱型を張出し壁面に若干の凹凸をつけるなど、正面性を強調したネオ・ク

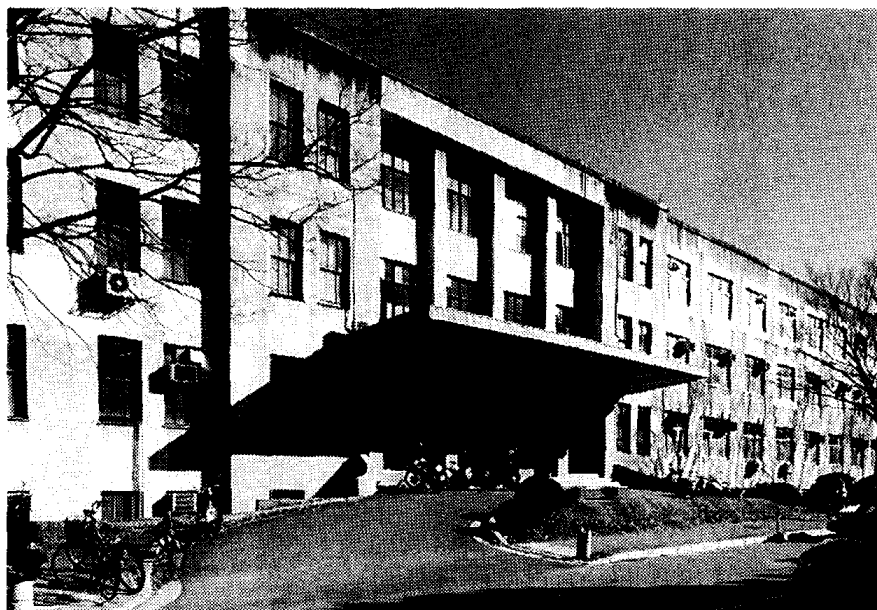


図 18



ラシズムに通じる意匠<sup>(46)</sup>とされていて、以後の機能主義的な建築群とは若干趣を異にしている(図18)。

## 結

以上、内田祥三資料を中心に、創設期の東山キャンパス計画について論じた。戦時下においては一般的に建設事業は滞りがちであった<sup>(47)</sup>。名古屋帝国大学に関する事業も例にもれず時局に大きく影響されたのだが、そうしたなかでも内田は、渋沢名古屋帝国大学総長の要望どおり「大学側から教育上種々の希望を建築に取り入れ」名古屋帝国大学の建築を、帝国大学として十分な内容をそなえたものとするための作業を行っていた。

営繕顧問としての内田は、関係技術者や部下に計画案作成を指示し、指導を行っていた。その過程で東京帝国大学キャンパス計画を参照しながら作業を進めていた様子を、うかがい知ることができた。

創設期の東山キャンパス計画案において、最も注目すべきは中央街路の計画である。最も初期の「昭和十五年名古屋帝国大学全体計画図」においてすでに、広幅員の直線中央街路が描かれていた。しかし、ここにみる空間的特質は、昭和十七年の名古屋帝国大学計画案には継承されなかった。

ただしそれは、戦後復興期のキャンパス計画において、より大規模なかたちで再現されるのである<sup>(48)</sup>。最後に課題点を整理しておく。計画案の作成主体は、内田が図面を入手した先から判断したにとどまっている。

特に「昭和十五年名古屋帝国大学全体計画図」の作成主体は確定されなければならない。また計画案の特質について論を深めるためには、他のキャンパス計画等との比較検討および計画理念の一般的背景についての研究を進める必要がある。創設期のキャンパス計画は復興期を経て今日のキャンパス空間の下敷きとなっている。今後創設期に

関する知見を踏まえて、戦後の計画を検証する必要がある。

本論をまとめるにあたり、名古屋大学施設部関係の方々（田村元技官、野口元技官、加藤技官、上赤技官、吉村技官）、東京大学キャンパス計画室（野上助手、駒田助手）に御協力を頂いた。名大工学部社会環境工学科の片木教授、西澤助教授、堀田助手には御指導および資料の御紹介を頂いた。同共通講座の皆様には御理解を頂き、特に院生・学生諸君には図面整理に御尽力を頂いた。記して謝意を表します。なお本研究は財団法人日東学術振興財団の助成による。

## 注

- (1) 筆者は名古屋大学本部施設計画推進室室員としてキャンパス計画に関わる数々の業務にたずさわっている。推進室では名古屋大学史資料室や施設部の連携・協力を得ながら、過去のキャンパス計画に関わる設計図面や写真などの収集・整理に着手している。
- (2) ここでいう創設期とは、名古屋帝国大学官制により敷地が現在の東山公園付近に定められた時点（昭和十四年三月三十一日）から太平洋戦争終結時点（昭和二十年八月）までとする。
- (3) 医学部および付属病院は鶴舞の愛知公立医学校校舎を引き継いでいた。
- (4) 渋沢元治 『五十年の回顧』 昭和二十八年 五十六頁
- (5) 内田は東京帝国大学キャンパスをはじめとする建築設計、中国・大同をはじめとする都市計画、防災研究など多分野にわたって業績を残す一方、都市計画東京地方委員会委員、建築審査会会長など、東京市（都）の都市・建築行政に深く関与した。東京都公文書館では、昭和五十八年より親族からの関係資料の寄託を受け入れ、整理・保管、目録の刊行、公開を行っている。この内田祥三資料目録第2巻（一九九五年刊行）に「名古屋帝国大学」と題された資料（ファイル一冊「東京 昭和十七年十二月」）

があり、敷地図・配置計画図・建物平面図など計9枚の設計図、予算や建物面積など規模算出に関する計算メモおよび面積表、連絡書簡、敷地写真が残されている。

- (6) 「内田祥三年譜」 伊藤三千雄十前野崑 『日本の建築—明治・大正・昭和 8』三省堂 昭和五十七年 一九八〇—二〇〇。  
内田に関する文献は多数に及ぶ。ここではこの他、村松貞次郎『日本建築家山脈』鹿島出版会 昭和四十年、および『内田祥三先生作品集』鹿島出版会 昭和四十四年（非売品）を挙げるにとどめる。

- (7) 前掲参考文献では、名古屋帝国大学より営繕に関する顧問を嘱託されたのは同年六月十五日のこととされている。

- (8) 内田資料の名古屋帝国大学関係の図面類はすべて感光紙を用いた複写図であり、原図は含まれていない。日付、入手元などのメモが記入され、また図面上に鉛筆等により後に書き込みがされているものもある。考察を進める都合上、表題（原資料に表題の記されていないものは年代と表現内容により「□」として仮名称）、年代・入手元等（図面内容とは別に書き込みのもの）、縮尺、体裁等、書込（図面の表現内容に関わるもの）、以上のような項目について整理し本論中に記載する。なお図面類のうち主要なものは原資料および複写写真をもとにインキング仕上げ、活字化等を施し体裁を整えた。これらの一部は原資料の写真とともに口絵に掲載した。なお複写は筆者による。

- (9) これらの区画整理事業にみる都市デザイン的特質については、堀田典裕「八事丘陵地における住宅地の形成過程とその空間的特質について —近代名古屋における郊外住宅地開発(II)—」『日本建築学会計画系論文集』 第四七一号 一九九五年五月の研究がある。

- (10) 同前掲4 九七—九八頁

- (11) 田村が医学部および医学部附属病院の構想を温めていた様子は、山元昌之（昭和十五年当時医学部書記）の回想「聡明敏活」春光同門会編『田村春吉』昭和二十九年 三四五—三四八 に記録されている。ただし山元は田村が構想に着手したのは昭和十五年夏頃としている。

- (12) 病棟のみでなく医学部教室にも同様の配置形態が採用されている。

- (13) 例えば日本赤十字社病院（東京 明治二十四年）など。大正期の療養所では東京市立江古田療養所（東京 大正九年）など。

日本建築学会 『近代日本建築学発達史』一九七二 7編 建築計画 参照

(14) 前掲11 三四八頁

(15) (中略) 当時大学本部の営繕課は、陣容が今のように充実していなかった(中略) 本部の諒解を得て、県の営繕課に応援を求めた。県の後藤(米太郎) 営繕課長の推せんで同課の土田(幸三郎) 技師と宮川(只一) 技師とを医学部(正式には医学部であったか、付属病院であったかは、今憶えていない 原文注)の囑託として先生のこのお仕事を手伝って貰ったのである。(前掲13 三四七頁) ただし山元は田村が構想に着手したのは昭和十五年夏頃と回想しているので疑念はのこるが、愛知公立医学校から移管された直後のことでもあり、本図は田村が同課の技術者に作成させ、その後引き続き営繕課に参加させたと考えるのが最も自然である。

(16) 昭和十一年着工、昭和十二年竣工、鉄筋コンクリート造3階建

(17) 愛知県職員録 昭和十四年

(18) 洪沢前掲4に下記の記述がある。「この年夏頃大蔵省では本学東山敷地(当時は前節に述べた如く未決定で予定地であった 原文注)の模型を作り、これに理想的の建築配置をなし建築計画原案を作成した。当時余は気がつかなかつたがこの模型が新聞に写真入りで報道されたために一層地価を高め敷地決定を遅延せしむる原因となった」(二二三頁)。文中にある新聞報道とはこの記事を指すと考えられるが、その模型写真には建築物は確認できず、敷地西側部分の敷地境界が示されているのみである。

(19) 内田は名古屋帝大創設建物の計画に際し作成した打ち合わせ記録、面積計算メモ、新営建物の坪数内訳表を残している。このうち坪数内訳表をのぞき、内田祥三私製のレポート用紙に自筆で記されている。

(20) 名古屋帝国大学創立当初、理学部の独立は見送られていたが(昭和十五年大蔵省予算案可決、昭和十七年三月勅令公布)これらのメモでは理学部・工学部別面積として考えられている。

(21) 『名古屋帝国大学創立概要』昭和十八年 九〜十頁 および『名古屋大学五十年史』通史一 一九九五年 三九八〜四〇二。予算総額は九百万円、そのうち営繕費には五百万円計上されている。

(22) 内田は「昭和一四年八月一日洪沢総長ト会議」メモ中、学生一人当たり面積「40坪」について「50坪ヲ要スルヤモ知レズ」

と記している。協議会での概算はその学生あたり坪数および若干多めの坪単価で行われている。

- (23) 教室、実験室などの面積(純面積)廊下を含まない)を積み上げて学生数で割り、学科毎の学生一人当たりの基準面積(純面積)を算出、それに係数をかけて総面積とし、名古屋帝国大学の建築規模計画の根拠としている。

- (24) メモ中「吉田技師」は吉田貢(東大助教教授兼同管轄課技師)と考えられる。「建築学会会員名簿」昭和十四年十二月を参照した。以下本文中建築学会関係者の経歴は同名簿を参照した。

- (25) 宗宮、山田らは昭和十四年度初頭には、洪沢の依頼により名古屋市東区西二葉町の愛知一中校舎を利用した理工学部仮校舎の改修計画を立てている。「名古屋大学五十年史」通史一 四一三頁

- (26) 本表は、名古屋帝国大学の三輪盛式会計課長からの送り状とともに送付されている。(昭和十四年 十二月二十八日)。

この面積表の総面積は一三、三一八坪(約四三、〇〇〇平方メートル)となっている。そのうちコンクリート造予定されている面積は一一、四九二坪(約三七、〇〇〇平方メートル)、現在の理学部の総面積にほぼ同じ)という大規模な計画となっている。

- (27) 「昭和十五年三月一日 洪沢総長来校協議」として「工学部サヨン<sup>6717</sup>」本部木造分<sup>901</sup>」など「創設工事建物坪数内訳表」の数値が記されている。ここでも内田算出の数値はこれからの数値を上回っている。

- (28) 内田資料中「昭和十五年六月十七日 伊部博士より 武藤博士によりことづけ受取」という書き込みのある「名古屋帝大整地之図」がある(掲載略)。「伊部博士」とは伊部貞吉(大蔵省管轄財局第二技術課長・昭和一四年当時)、「武藤博士」とは武藤清(東大建築学科教授・同)である。なお東山の敷地では「先づ鏡ヶ池東側に於て約五千四百坪の整地計画をなし、大蔵当局とも折衝の上、愛知県土木部の事業として第一回整地工事に着手した(『名古屋帝国大学創立概要』昭和十八年)。

- (29) 内田資料中、木造建築群に関する資料は本敷地整地図以外まったく残されていない。熱心な鉄筋コンクリート構造推進者だった内田は、当然、木造施設では不十分と考えていたであろう。

- (30) 後に木造の武道場がほぼこの位置で計画されている。

- (31) 実際には現在のグリーンベルト西端と附属高校グラウンドの間には約6mの段差がある。また農学部前池畔と山の上の軟式テニスコートの間では約三十メートルの標高差がある。

(32) ただし本図では図2の田村案とは異なり、かなり具体的に諸部門の所要面積を設定し作図を行っている。

(33) 千種区東山元町内の敷地が新たに加えられている。

(34) 本多静六・稲垣龍一『名古屋帝国大学敷地内植樹調査報告』昭和十五年 名古屋大学史資料室蔵。本報告書には植栽設計図が附されていたようが所在は確認されていない。以下本論に関連する内容についての要約を行う。

一、調査方針 調査目的は新敷地の植樹における樹種選定および造園計画策定である。実地調査と周辺地域の老樹名木調査により、帝国大学を象徴するに足り、かつ長く樹齢を保つ樹種を選定することを主方針とした。造園計画の方針は、いわゆる大  
学コロニーによる学生の陶冶を考慮した。なお敷地は水景が不足している欠点がある。鏡ヶ池を利用し西側境界線に沿い正門前にカナルを設け、俗界と学園を区分する。池周辺敷地は建設に適さず、将来農学部水産科実験室に充てるべきだが、さしあたり花卉園とする。

## 二、位置及び環境 略

三、地勢及び地質 地勢、地質についての概説。鏡ヶ池の水景を造園計画に取り入れるべきである。

四、植生状況 敷地内の土壌は浅く酸度が高いため大木が生育していない。谷間は湿地で萱その他の雑草に覆われている。東方の山地は自然の状況に放置されている。ただし表土に落葉が堆積している地域は将来成林が期待できる。

五、将来の学園建設方針 予定敷地は長方形で中央に本部、講堂、図書館を置き、西部を理工学部、東部を医学部・附属病院とする原案である。附属病院への交通、教職員住居、学生の体育施設等に課題点がある。病院については田村医学部長の意見のように北方隣地を拡大し展開するべきである。運動場位置は本部に落ち着きを与えないので不適當である。通勤に不  
立地なので西南隣接地を学員村、東方一帯は学生村とし、大学総合運動場をも設置した新式の大学コロニーとするべきである。

六、植栽計画方針 大木の植栽には部分的な土壤改良と適当な樹種の選定が必要である。谷間や北向きの土地には成林しているところもあり建設用地以外は林を保存するとよい。周辺地域の調査より(クス、ケヤキ、イチヨウ、イチイガシ、アベマキ、ムクノキ、クロマツ、シラカシ、アカガシ、サイカチ、カヤ)の十二種を巨木として成長させ得る樹種として挙げる。中でも主要樹種は(クス、ケヤキ、イチヨウ、クロマツ)である。植栽は主要幹線道路、第二級道路、防火植帯および風致樹叢に分

けて立案する。

(イ) 主要幹線道路植栽 (植栽計画図参照) 主要幹線道路は正門から本部に至る幅員十六間 (原案には二十五間とあるが十六間を適当とする) の四条並木道路とし、使用街路樹はケヤキおよびクスの二種とする。四谷八事線と本幹線道路とは陸橋による立体交差の方式を採用する。陸橋上はあくまで並木の延長に見えるよう両端に小灌木を植栽する。

(ロ) 第二級道路植栽 略

(ハ) 防火樹帯 構内は各建築ブロック毎に、防火樹帯の設置を望む。樹種はイチヨウ、サンゴジュを適当とする。

七、植栽及び手当方法 略

八、移植苗圃の計画 費用の点、樹型を整えるという点から建築着手の遅い西部溜池跡地に移植苗圃を造る。

(終り)

(35) 現在のグリーンベルトの並木も「けやき」「くす」となっている。植樹計画の経緯は機会を改めて記したい。

(36) 幅員の根拠を含め中央街路の計画理念について現時点では確たる言及をすることはできない。この計画図が在名の技術者によるという考えから、愛知県、名古屋市による都市計画、公園設計事例などとの関連について検討することを考えている。

(37) 内田資料には、名古屋帝国大学の営繕担当者の選出に関わる連絡書簡がおさめられている。内田は営繕担当者を在名で若手の東京帝国大学建築学科卒業生から選出しようと試みていたようで、名古屋に人脈のある中澤誠一郎 (大正九年卒、昭和十四年当時内務省技師第二技術課長、大正十一年から昭和七年まで名古屋高等学校に講師として在任) が連絡・中継を行っていた。具体的に候補となったのは、堀井啓次 (大正十二年卒、愛知県建築課長地方技師)、広川誠三郎 (大正十三年卒、名古屋高等工業学校建築科教授、のちに名工大名誉教授) などであった。堀井の書中に見るとおり名古屋帝国大学営繕担当といっても確固たる官職が用意されたわけではないようで、当面堀井・広川のいずれかが兼任するかたとされた。

(前略) 堀井君より別紙の通り返事有之候間御覽被下度、先ハ右不取敢御報知迄如斯ニ御座候 (後略)

(昭和十六年 鉛筆書込) 七月二十八日

内田祥三様

中澤誠一郎

(前略) 扱御尋ねの件大略次の通りご報告申し上げます。(中略) 名は営繕課長でも□官たる技師の定員も無く又当分取り得る見込も無く、更に当分の主たる仕事は管財局その他諸官庁との連絡にあつて本格的に設計の責任持つ訳でも無いとすれば若い人をさがすとしても相当困難な問題でありませう。(後略)

七月十日

堀井

中澤様

(前略) 先便にて申しました通り、私に適当な心当たりの候補者がある訳では勿論ありません。総て御説の通り誰か兼務するのが一番好い方法かも知れません。兼務とすれば(中略)、広川君か私と云ふことになります(後略)。

七月二十三日

堀井啓次

中澤様

堀井、広川両氏のうち、渋沢総長は、内田に宛てた書中で、職務の状況とともに「将来卒業生採用等の聯絡上便宜」もあるため、広川が適任と述べている。

(前略) 堀井廣川両氏につきていろいろ考慮致候処、堀井氏ハ公務非常に御多忙の様子ニ有之、到底御承諾を得ること困難なるべく、一方廣川氏ハ多少職務に余裕もあり且つ将来卒業生採用等の聯絡上便宜も有之候間、同氏に御願申上度存候。

(後略)

昭和十六年八月四日

渋沢元治

内田祥三殿

(以上文中句読点、傍線筆者 □は判読不能)

元名古屋大学施設部文部技官、田村栄吉郎氏によると、戦後、広川教授には建築構造の専門的立場から工学部建物の構造設計



について協力を仰いだが、彼が引き続き全体計画に深く関与したことはなかっただろう、ということである。

- (38) 注(34)のとおり本多らは鏡ヶ池の水景を積極的に評価している。昭和十四年二月に名古屋都市計画風致地区が指定され、市内二十二箇所がその対象地区となっている。東山キャンパスも当該地区である。敷地決定当時、鏡ヶ池が「一段と付近の風致を彩」っている(名古屋新聞 昭和十四年五月八日)と報じられるなど、一般的に鏡ヶ池周辺の風致には感心が持たれていた。

- (39) D. Van Zanten, "Architectural composition at the Ecole des Beaux-Arts from Charles Percier to Charles Garnier", A. Drexler ed., *The Architecture of the Ecole des Beaux-Arts*, London, 1977, pp. 236-242.

- (40) 内田の東京帝国大学卒業設計の劇場計画には、エコール・デ・ボザールの影響が明らかであることから見て、このような構成法を習得していたと考えられる。

- (41) 「名古屋帝国大学開学記念絵はがき」(昭和十八年 名古屋大学史料室蔵)には「完成後の名古屋帝国大学」が描かれている。中央街路の形状や建物の配置は基本的には、この「名古屋帝国大学計画案」に従っているが、注意すべき点もある。本部建物は瓦屋根を乗せた日本趣味の建物として描かれている。

『開学準備委員会第二回打合せ記録』(昭和十七年十二月三日 名古屋大学史料室蔵)に次のような記述がある。「(前略)絵構図についての総長から左の意見あり。一、本部の予想図は面白からざるに付、日本的に加味修正のこと(後略 傍線筆者)。」

つまり絵はがき作成の際渋沢総長が作画担当の画家に指示し、本部建物は瓦屋根を付加させたのであり、実際の設計案にこの意匠が採用されたわけではないと思われる。その他、本部前にサークルが描かれ、その中央に塔のようなものが描かれているこ



と、建物形状が少しずつ異なること等、昭和十七年「名古屋帝国大学計画案」との相違点は多い。戦後間もなくの空中写真にも本部前にサークル状の整地跡がみられるので、昭和十七年内には計画変更がされた可能性がある。

(42) 地下室の採光・換気等のために建物周辺に設けられる空堀

(43) 実際の旧一号館の平面型は東西ウイング部分で中廊下型になっている。

(44) 一号館は、昭和一八年八月に地鎮祭を行い、以後基礎の掘鑿、コンクリート型枠工事を完了したが、以後資材不足のため工事は進捗せず、昭和二〇年五月の名古屋大空襲の際に基礎型枠は焼失した(『名古屋大学工学部二五年のあゆみ』昭和三十九年)。

(45) 元名古屋大学施設課文部技官野口誠氏に話を伺った。

(46) 同系統の意匠による建築の代表例には、第一生命館(渡辺仁・松本與作 東京 一九三八)を挙げることが出来る。

(47) 井上章一は、当時の公共的建設の差し控え(大規模工事の中断や木造建築への切り換え)には、時局の切迫を建設資材の制限で訴えるという当局側の意図が働いていたことを指摘している。「戦時体制と都市空間」『戦時下日本の建築家―アート・キツチュ・ジャパネスク』朝日新聞社 一九九五、第二章

(48) 昭和二十九年に名古屋大学敷地が都市計画学校として用途地域指定された際の関係文書綴に当時の配置計画案を確認している(愛知県公文書館蔵)。そこには幅百二十メートルという現在と同幅のオープンスペースが計画されている。

(きかた・じゅんね 施設計画推進室)